

あのとくに生きて！

—旅順から遼陽への旅路—

宮城県 岩崎 恭子

はじめに

あの大戦の終結、それからの引揚げ、そしてさらに明日の「生」へのために予想もしなかった苛酷な運命を背負い、艱難辛苦を重ねてどうやら生き延びて、ここに六十有余年の歳月が過ぎようとしている。改めて、今生きている！ 生かされていることを思うと誠に感慨深いものがある。

思えば、生まれてこの方、国家の命運を賭けた戦争に撒き込まれながら成長し、学業を中断されての学徒動員、国の運命に協力しながら軍需生産に励んだことや、戦に敗れた結果から、好むと好まざるとにかかわりなく身にふりかかってきた悲劇な出来事、これらのことはいまだに忘れられず、私の脳裏に深く深く刻み

こまれている。このことを後世の人々に語り継ぐべき大切さとその重みを最近つくづくと感じるようになり、なにか書き残したいと考え、当時を思い出し思い出ししながら意を決した次第である。

一 揺籃期の旅順

(一) 華麗なる珠玉

私の両親は、詳しいことはよく分からないが、大正七（一九一八）年に福島県から中国の当時は長春といっていた所に移った。父は、南満州鉄道株式会社（一般的に満鉄と呼ばれていた）に関係していたようだが、そこで兄が誕生した。しかし、勤務の都合なのか昭和二（一九二七）年には、また日本に戻った。私は昭和四年の八月に日本内地で生まれたが、まだ物心のつかない昭和五年に関東州の旅順に移った。そのときの父は、官僚の身分になっていた。そこで妹も生まれて、平和で落ち着いた生活が続けられた。それから敗戦になるまでが、本当に心豊かにして何の不安も不平もない日々であった。私は、その時代を七色の光を放つ珠玉に例えている。その一つ一つの珠玉には、生を受け

てから十有余年にわたる華麗な日々の模様が、丹念に詰められている。その中からいくつかを、手の平ののせてみる。どんな模様が浮かび上がってくるのだろうか？

まずは幼年期における旅順の旧市街

(夏の夜祭り)

家族そろって浴衣がけで乃木町通りの夜店を歩いた。人出がいっぱい。赤いほおずきを口にほおぼり鳴らして歩いたが、私は悦に入っていた。しばらく歩き疲れると、慈父の肩車に乗ったが、上からの眺めはまた格別で、大はしゃぎをしていた。帰り道に見た、白玉山の表忠塔から稜線にかけての放射状に張られた光の線が、晴れた夜空に映えて美しく輝いていた。

(昭和園)

家族と一緒に昭和園で、演舞を観覧したことがあった。舞曲の「剣の舞」に合わせて、きらびやかな衣装を身につけた一人の舞女が、剣を手にして舞台を所狭しとばかりに美しく激しく舞っていたのが、非常に印象的であった。

(記念品陳列館)

ここは、私たちにとって格好の良い遊び場であった。満人の子供たちと一緒にあって、十二、三人ぐらい集まっていたと思う。砲台跡を中心にしての「戦争ごっこ」を、にぎやかにそして誇らしげにしていた。遊びの最中に、Aちゃんが何気無くつぶやいた言葉が強く心に響いた。「お父さんが中支で戦争をしているの！」という意味だったと思うが、幼な心にも一瞬なんとも言い様のない寂寥感が走り、遊びをためらう気持ちにさせられたことがあった。

(家の二階からの光景)

当時、私の家は出雲町という所にあつたが、その家の二階から西側を眺めた光景は、印象深いものがあつた。特に、春、秋の晴れ上がったとき、向かい側に見える小高い丘の斜面を、朝鮮人の若い女性が七、八人の列をつくって通っていたが、その人たちは、ピンク色、水色、緑色、そして黄色など色とりどり薄衣の手ヨゴリを着ていて、それが微風に揺れてきれいであった。窓から見ても、見とれるようだった。

(黄金台での海水浴)

夏になると、母に伴われ妹と共に黄金台に海水浴に行った。お揃いの水着で、浮き袋を体につけて泳ぎに夢中になっていた。寄せくる波にうまく乗ったときは大変に面白く、時間も忘れて興じたものだった。海が荒れたときなどは、海水を引き込んだプールに入った。そして時間になると潮騒の音が心地よい浜辺で母の手作りのお弁当やおやつを食べたが、これが大変においしく、口に運ぶのもどかしかった。傍らでパラソルをさしている母の横顔が、美しく見えてすてきだった。

(七・五・三)

七・五・三のお祝いには、母が仕立てた祝いで着る袖を通したものだ。帯は蝶結びにと言う母の手で、見事にそして美しく結ばれた。妹とお揃いの晴姿に着飾った。お宮参りの境内での行き帰りは、着物の裾や長袖が気になって歩きにくいことで大変だった。平常の私と違ってこのときはばかりは、おしとやかな私だったが、心の中は嬉しさでいっぱいだった。帰りには、妹と並んで前や後と晴れ姿を記念に写した。

小学校の三年生になったころには、新市街に引越越しをして松村町に住んでいた。

(アカシアの街路所の下での遊び)

引越しても、すぐに近所のみんなど仲良しになり、通りやんせなどをお互いに手をつないで歌いながら元気に遊んでいた。

(ピリヤード)

河内淳子さんの家は木村屋の隣にあつて、ピリヤード屋さんだった。店内はいつも威勢の良い声で満ちていた。二階が私たちの遊び場であった。いつも五、六人が集まってにぎやかに遊び回っていて、ときどき階下から注意されていた。注意されると外に出て、近くの博物館に入るのがコースだった。博物館の正面入口から駆け込むと、突然として「木乃伊」ミイラとご対面ということになり、「きゃあ、きゃあ」言いながら「木乃伊」にあいさつをして、そのまま遊び回っていた。夕方になると、アカシア通りを旅順工大の学生の一団が、アクションをつけながら放歌し、朴歯の高下駄の音をこ

とさらに立てて往来していた。

(我が家の周辺)

我が家の真向かい通りはかなり巾広で、子供たちの遊び場としては最適であった。通りを中心にして、右側に旅順高女があった。左側の角は小野寺とし子さんの家で、おそば屋さんだった。そこから少し離れて成松写真館があった。この広場は、当時を知っている人にとっては思い出の深い場所である。縄飛び、ゴム飛び、まりつき、そして陣とりなどの遊びがあった。このころ父の慈愛深いまなざしが、この通りでよく感じられたことが忘れられない。

(「金と銀」の曲)

早朝になると旅順高女の校舎から「金と銀」の曲が流れてくる。この曲は、旅順高女のテーマ曲で、この曲に合わせて生徒の一日の行動が律せられていた。この曲が聞こえてくると、あちらこちらから制服姿の生徒が、私とはすれ違いに我が家の前を通って登校していた。清々しい気分になるひとときであった。

(肝試し)

小学生でも、夏休みになると学校での合宿があった。合宿の最初は、恒例の行事として肝試しがある。最初に、八木橋先生の怪談話を聞いてから行動開始となる。薄暗い中を、目ざす室のドアのノブに柔道衣の帯を上げて来る。そして次の番が反対にそれを取って来るということだが、広い校舎の中を八木橋先生の話が頭の中にこびりついていて、恐怖感が満身にこもっていたことを思い出す。

(大正池のスケート)

冬になると、大正公園の池が凍ってスケートリンクになる。ロングスケート靴で一気に疾走する快感は、素晴らしいものがあった。寒くても時間が経つのを忘れてしまう。カーブを乗り切るのが難しかった。夜には、兄がスケート靴の刃研ぎをしてくれた。

(旅順工大祭)

旅順工大は壮大な白亜の帝政ロシア風の建物で、威容を誇っていた。その、一年に一度の工大祭は見事だった。各専攻分野毎にそれぞれの趣向を凝らした華やかな飾りつけと本領発揮の催しには、大勢の人が集ま

つてにぎわった。子供向けには子供の興味をひくように随所に工夫が施されていて、見る者を釘付けにしまった。その他にも、奇怪な空間に得体の知れない怪物や怪しげに動く人形など、工大生らしい催しが工夫されていた。壮快な気分にはさせられる祭りであった。七色の光を放つ珠玉の一部を取り出してみたが、そのわずか十有余年の歲月の中で、心身共に貴重かつ豊かな体験であった。素晴らしき旅順に在したことを誇りに思う。これも敬愛する亡き両親、そして亡き兄のお陰と感謝に絶えない。父は、昭和十七年に病を得てこの旅順で亡くなっている。

## (二) 学校生活の思い出

### (アカシアの揚げもの)

当時の旅順師範学校付属小学校では、今で言う学校給食があった。ある日の昼食時のこと、リノリウムの床上を上履を履いて二列になって、八木橋先生の指図に従って地下の大食堂に向かった。ほどよい食欲をそそる香りが、鼻をくすぐってきた。今日のご馳走は何だろうかと想像しながら。既に先着の男子師範生は、

席について食事の真最中だった。私たちも、急いで級別に決められているテーブルの席についた。テーブルの上には、洋皿に美しく盛り付けられたお料理が並べられている。全員着席。八木橋先生の合図で手を合わせ、感謝の言葉を唱えてから食べ始める。白い洋皿の上にはきれいで、箸をつけるのがもったいないようので、しばらく見とれていたが、周りの友だちはもうご飯をお代わりしていた。テーブルの端では、教生の男先生が手首の腕時計に指先をあてている。私も急いで食べなければと、最初に乳白色の揚げものに箸をつけた。衣を箸で静かにとり分けると、中身はアカシアの花房だった。「これは！と心の中で感嘆の声を上げていた。口に入れると、甘く乳くさい味と香りがいっぱいだった。家に帰ったら早速作ってみよう、そして家の人をびつくりさせようと思った。うきうきする気持ちをさえて食事を終えた。

家に帰るとすぐに、二階のベランダから見事な花房をいっぱいにつけたアカシアを、一房一房丁寧にとった。そして、その日の夕食の献立の一品となった。家

族からは珍しがられ喜んで食べてもらった。昭和十四年の初夏のある日のことである。

(楽しい学習)

旅順師範の学び舎は、旧帝政ロシア時代の石造りの白亜の殿堂であった。二階は師範本校で、私たちの付属小学校は一階で、一体の間柄であった。先進教育を授かり、多彩にして熱意あふれる指導の下で楽しく学べたことを、終生の誇りとしている。生徒同士も男女共学のクラスで、みんな仲良しであった。特に国語の八木橋先生は、単調な問答形式による一斉指導ではなく、独創的で自主的な学習形態で、活気のある教室だった。他には専門教科の先生、それに男・女師範の教生が、毎学期クラスに三人配属されていた。

当時は外地での先進校であったので、関東州内はもとより、満州各地からも教育関係者・各学校長などが、絶えず教育研究会場として来校されていたことが印象的だった。

二 遼陽での生活

父が、昭和十七年一月七日に病気によって突然亡く

なってしまった。異郷の地でとり残された私たち家族の境遇は一変した。母、私、そして妹の三人は、母の勤めの関係から、住み慣れた旅順から奉天省の遼陽に移った。遼陽市は、軍人軍属の街でもあった。約四キロメートルぐらい離れた所には、関東軍の火工廠があった。また、遼陽市の南の鞍山には、当時有名だった鞍山製鉄所があった。

母は、将校宿舎の東垂寮で和服に白のかつぼうを着つけて、電話の取り次ぎ、面会者の応接などで一日中忙しそうに立ち働いていた。私たちも、りりしい将校服の姿に頼もしさを感じていた。特に山木中佐は、私たちの家族を優しく見守って下さった。私は山木中佐から書道の手ほどきを受けた。

だが、戦局が進展するに伴って、良いことばかりではなくなった。昭和十八年の終わりが、隣の橋寮の一階で人垣ができていたので何気なく間からのぞくと、満人が裸にされて太い竹棒を組んだ上に座らされて、軍属の工員に竹刀で激しく打たれていた。満人は無抵抗で、ただ悲鳴とも怒声ともつかないよううめき声

を発していた。それが今でも耳の底に残っていて、何かの際に聞こえてくる。

また、学校の帰りに見た光景では、バス待合室の奥にある小さな部屋で、満人が長腰掛にしばらく、仰向けに寝かされていた。そこで軍属の人が、満人の口にじょうごをふくませて、水を立て続けに飲ませていた。満人は顔面蒼白、苦しきのあまりにうめいていた。水を飲ませられて腹がふくらんでくると軍靴で圧迫した口から水が激しく逆流していた。まさに、半死半生の状態となっていた。どんな罪を犯したのかは知らないが、水責めの拷問を大衆の見ていた所で行っていたのは、同じ日本人として悲しい思いであった。あの思いがった行為は、思い出すと身の毛がよだつようだ。

昭和二十年四月に、私は遼陽高等女学校の四年生になったが、進級すると間もなく全員学徒動員となった。

私は、桜ヶ丘の白百合寮に入寮していたが、同室の朝鮮人の金沢さんとは気が合わず、いつも意見が対立して口喧嘩となつてしまい、先生が仲裁に入ることも度々であった。

しかし、当時は既に英語教育は廃止されていたが、夕食後の学習では特別にひそかに学習を受けることができた。

動員先の関東軍火工廠第三工場への往復は、額の中央に日の丸がつき、減死奉公と太く書かれた鉢巻きをきりりと締め、バスガイド風の上衣にストラックスを履いた。ストラックスの裾は、ひもを絞状に結んでもんぺ風にしていた。そして肩から斜めに救急袋を掛けている勇ましい姿で隊列を組み、歩調をそろえて軍歌を唱和しながらの行進であった。私は、目の前を行く笹井さんの髪が、きれいに二つに分けてあるのに見とれながら歩いていた。正門前を通るときには、軍服姿の若い将校さんや兵隊さんが拳手をして応えていたことが、思春期の若い娘心にひそかな喜びを与えてくれていたようだった。

私たちの担当作業は、手榴弾の製造だった。黄色火柴を扱うので、全身が黄色に染まって、お互いに顔を見合せては笑いこけたことを思い出す。そんな中でも吉林・營口・錦州など、満州国内の各高等女学校や

大連の南満工専などから集まって来た動員学徒に負けるなどという合言葉のもとに、意気込んで働いていた。

昼食は、火工廠の食堂で軍属の工員さんたちと一緒に食べた。高粱が主体で、ときにはコーンが混じるのが主食で食べにくかった。海藻類やフキの佃煮もあった。

昼食を終えると広場に出て、新緑の映える樹木の下で輪になって、だれに気兼ねすることなくいろいろな歌を声高らかに歌っていた。そのころはまだ気分は明るく、なんの憂いもなく楽しかった。

### 三 終戦前後の遼陽

「広島は、特種の新型爆弾（そのころは原子爆弾などということでは知らなかった）で一本の草木も無くなくなり全滅した！」などという話が広まり、これから先どうなるのだろうかという不安が、みんなの心をよぎっていた。

八月十五日の玉音放送は、火工廠の広場に全員が集合して謹聴した。しかし、むっとする暑さの中で、ラジオから流れてくる天皇陛下のお言葉は、途切れ途切れで、しかも雑音が大きくて内容はよく判断できな

ったが、聞きながら考えるに「戦争をやめる」ということは分かった。

今の今まで戦勝を信じ、そのために日本人は男も女も、老いも若きも一丸となって奉公していたのに、まったく想像することもなく、信じられない結果となってしまった。心の中は、無念の涙と暗い気分だけとなっていた。それでも、心の隅では「戦争は終わった！ 終わった！」の叫びも起きていたようだった。

八月二十日に勤労働員が解除されて、即日帰校となり学校に四カ月余りに戻ったが、翌二十一日からは無期休校となり、家に戻った。

振り返ってみるに、女学校二年生になった昭和十八年四月から、終戦の日まで教科学習期間の大半を、奉仕活動とそれに引き続き勤労働員に打ち込む結果となり、本来の教科学習がなされずに、勉強に対する意欲が募るばかりだったが、無期休校となりその望みも実現不能となってしまった。

それからの遼陽は、あののどかで落ち着いた平和そのものの街の様子は、一転してしまった。手の裏を返



すような満人の横柄にして不遜な態度、日本人に対しての口汚い罵声、それがエスカレートしての横暴な行為、そして日本人や日本人の家に対しての略奪行為などが日常のこととなってきた。特に、終戦前からの蓄積された恨み辛みから、軍人・軍属に対する攻撃は目に余るものがあった。

私たち一般人の苦難も日増しに加わってきた。その最たるものは、食糧の不足であった。当座の間に配給されたものは、種類・量共に少なかった。主食代わりの玉蜀黍とうもろこしの粉、ポミーは調理が難しかった。そのほかには高粱や粟などもときどきあったが、動物性たんぱく質はゼロに等しかった。栄養が低下するので、満人と交渉して配給された穀類を鶏卵に代えてもらうこともあった。大豆では、自家製の納豆を作って貴重な栄養源としていた。

ある日、兄が鶏肉用としてひな鳥をどこからかもらつてきて、しばらく家の中で飼っていたが、日光浴させるために外に出したが、家鴨のようにがにまたでよ

たよたしながら歩いてきた。その格好がおかしくて、みんなで笑った。みんなで笑うことなど、久しぶりのことだった。

大分ときが経ったある日のこと「くつ、くつ、くつ」と妙な鳴き声を出したので鶏小屋をのぞくと、ピンポン玉ぐらいの大きさの卵が生み落とされていた。私は歓声を上げた。それからは、餌をやるのにも張り合いがあった。この卵は我が家の貴重なたんばく源となり、かわいさも増した。私たちが引き揚げる際には、妹がこの鶏を残留する松尾さんの家に届けた。

万が一の場合に、日本人として辱めを受けないために、自決用の青酸カリが各家庭に人数分だけ配分された。この先の命は保証されないのだと、深い谷底に突き落とされたような感じがした。上からは、「集団自決を執行する日時・場所は、追って示す。通知のあり次第、実施する。各自、今から覚悟をしておくように」という趣旨の達しも受けた。

そのうちに、ぼちぼちと町内からも避難する人たちが出てきた。私たち一家も、裏山に避難することにな

った。これから、それぞれの家庭がとる行動方針によって分かれた。幼児がいる家族などは集団自決組となり、各人、家でも身を清め、清楚な身なりに整えて、薬を持って悲壮な覚悟で指定された場所に集まっていた。

裏山に避難する私たちの組は、夕方遅くに静かに隊列を組み、当座必要とする日用品、食糧、水筒などをリュックサックに詰め込んで背負い、両手に持てるだけの物を持っていた。暗がりの中、ロータリーの酒保辺りに、不気味な赤い火が見えた。すわ！ 集団自決の決行か？ と、みんな色めき立って、静かに手を合わせて合掌した。間もなく東京陵（遼陽市桜ヶ丘のこ）と）中心部の様子を見るために、連絡班を出すことになり、兄を含めて若者五、六人が選ばれて出発した。兄の無事を神に祈った。

「自決中止！ それぞれ家に引き返すように！」との伝言を持った連絡班が、夜明け近くに戻って来た。無事に戻って来た兄の姿を見て、ほっとした。

集団自決組では、まず最初に乳幼児を死に旅立たせ

てしまった後の指示であったとのことで、半狂乱となった母親たちで悲惨な有様になっていた。

#### 四 八路軍・国府軍・ソ連軍

日が経つに従って、日本内地への引揚げはできるのだろうか？ という不安が募ってきた。このことに関しての正確な情報が入ってこないことが、苛立ち、不安、それからくる恐怖感にさいなまれるのだった。

そんなところに、共産八路軍が突如として侵入して来た。各家に土足のまま、四、五人が組を作って入っている武器は日本軍のもののような。室内を見回して目ぼしい物を見付けると、片っ端から略奪していった。こんなときの母は、私たちの前に毅然とした態度で立ちあはだかつていた。

八路軍が撤退すると、すぐに国民政府軍が入った。八路軍とは違い、軍服も整ったものを着ていて、言葉も穏やかで全体的に端正だった。上官らしい者が、「我々を恐れることはない。下級の兵隊が何か希望を申し出たら、なるべく応じてほしい！」と身ぶり手ぶ

りで言っていたことが印象的であった。

それらの前には、ソ連軍もやって来た。ソ連兵は至る所で野蛮な行動をしていて、場所柄もかまわずに乱行をした。遼陽でも随分多くの女性が犠牲者となったらしい。あのぎらぎらした目は、まさに野獣・猛獣のたぐいだ。我が家でも、「どうもこっちに来そうだ！」と直感が走ると、母、私、妹はすぐに南側の窓から飛び出して防空壕に隠れたものだった。朝鮮系の女性が犠牲となつてくれるということ、日本人の家から和服を提供するように、との民会幹部からの依頼があった。もちろん実情を理解し、供出をした。

やがてだんだんと落ち着きを取り戻した。遼陽市内の治安も良くなり、外出もできるようになった。ときは既に十一月になっていた。

## 五 楽しい桜ヶ丘女学校

治安が少しずつ回復してくると、勉強のことが問題になってきた。桜ヶ丘日本人居留民会や、火工廠の残務整理などで残留している関東軍の将校、そして進駐していた国府軍の幹部などの人たちの計らいで、「日

本の将来を担う子供たちを無事に内地に帰すべき」という決議がなされた。そして引き揚げるまで、国民学校を利用しての学習が行われることになった。私も、培われた旅順付属小学校魂で、教科学習に専念できる喜びと感謝を持ったものだった。指導の先生は、学徒動員で残っていた南満工専の学生であった。川原・河田・百々・岩佐・木藤・宮崎さんたちと、鶴丸泰子さんのお姉さんなどであった。

英語は久しぶりに大きな声を出して発音したが、ときどき脱線しながらユーモアを交えての会話などで、心や肩の緊張がほぐれてきた。支那語はユニークな授

ホーリチンツアイライ

業で、「何日君再来(君いつまた帰る)」から始まり、

歌いながらの学習で面白く、体操はバレーボールが主で、明るい笑顔で円陣パスをしていたが、「〇〇さんばかりボールが行く！」とかの言葉が飛び交って乙女心が騒いだものだった。数学は幾何の宿題がでて難問解決で、深夜までかかって四苦八苦したことがあった。翌日、先生に提出するときには、私は得意満面、先生

もニツコリとほぼえんで下さった。

そのほかに、国語、作文、代数、物理、化学、習字、図画、そして裁縫など全教科を習い、楽しい学習だった。年令的にもあまり離れていない先生と生徒ということもあつて、四、五人の先生は我が家にまで来て下さり、和やかに家庭料理でおもてなしをした。

画用紙に印刷した成績簿と、それよりもやや厚手の用紙の成績表には点数や席次も書かれていて、卒業証書も頂いた。卒業証書には「右之者、本校第四学年ノ課程ヲ卒業セシトヲ証ス 昭和二十一年三月三十一日 桜ヶ丘女学校 吉野校長」とあつた。

#### 六 引揚げ・あの苦しみ！

日本軍施設の残務整理などのために、滞留する人とその家族を除き、遼陽にいる大部分の日本人が、第二次引揚隊を編成した。私の家族は、「四大隊六中隊の二小隊」に所属した。

家財道具一切をそのままにした。「日本人が満州で得た全品あらゆる物は、満州人のものだ！」という思想が流れていたので、何も手をつけずにおいた。

布団袋で背中からはみ出るような大きさのリュックサックを家族の人数分だけ作り、それに当座必要な着替えや日用品を詰め込んで背負った。持ち帰れる金は、一人千円宛準備した。食糧は、保存のきくように工夫して調理した。塩ゆで卵、みそのから煮、乾パン、缶詰などを携行した。貴金属など、携行を禁じられている物が途中で発見されると、その所属する一ヶ大隊全員が滞留使役に回されるといふ嚴重な指示であつたので、後髪を引かれる思いで残置した。全員無事に帰れることを、神仏に祈願した。

自分の体重と相応する重さのリュックサックを背負い、悔し涙をにじませて、無言で集会所に向かった。母は体調が悪くなり、食事も喉を通らなくなり、一個十円のお握りを買ってお粥にして食べるようになった。遼陽の駅からやつこのことで無蓋貨車に乗ることができて、葫蘆島に向けて出発した。ときは昭和二十一年六月二十七日だった。

大陸の太陽がぎらぎらと照りつけると、疲れた体には一層こたえる。青い葉っぱがみるみるうちに萎える

ように、体力が消耗していくようだった。無蓋貨車の上から見回す景色は白っぽく見え、ときおり風に舞った黄色い土埃が大きく輪を描き、そのうちにそれが尾を引いて見る間に頭上に寄せてくる。土埃のかいまに、満人の民家がぼつりぼつりと見られるだけで、広漠とした中をいつ終わりを迎えるのかと考えてしまうほどに長いときが、空しく過ぎていった。

のどが焼きつくように渴く。水っぽいものが欲しい。だが、やたらに口に入れるのも危険だ。薄汚れた手を見る。出発したときは真っ白い夏制服であったのに、今は汗とほこりがしみ込んでしまい、いつしか鉛色となり、その上に心なしか異様な臭いを放っているようだ。

だれかが放尿を訴えた。長くなつたぼさぼさの髪に、耳垢をつけ背を丸めた姿の人だった。周りの人たちに気遣いながら、無蓋貨車の片隅に設けられたカーキ色のシートで張りめぐらされた所に向かって、よろよろと歩み出した。やがて放尿を済ませたのか、進行している貨車から便壺を車外に向けて傾けたのか、便壺か

らのしぶきが、直進方向と反対側に座っている人たちの顔や頭や上半身にかかった。そんな事態になつても、みんなは口々に「汚い！」とか「うわあ！」とかの力の無い言葉を吐くだけで、体は動かなかつた。それほど貨車に詰め込まれていて、動くことができなかつたのだ。人の体以上に大きなリュックサックが、所狭しと積まれていて、そのすき間に人が詰め込まれているという有様で、みんなは放心したようにぐったりと座っていた。

そのような苦しい思いをしながら、列車はやがて最終目的地の葫蘆島に着いた。

葫蘆島に着くと、まず最初に目を見張るような巨大な船体が、岸壁に横たわっているのが目に入った。そしてそれに次いで、長蛇の列が幾重にも岸壁に向かっていっているのが目に映った。まるで蟻が巣穴に向かっているように思えた。私たちもすぐに、その列の後ろにへばりついて検査を待った。乗船不適合者が一人でも出ると、その一団は乗船できずに滞留して労役に服することになるといふことで、みんなの顔は緊張していた。

検査は無事に終わり、乗船することができた。

昭和二十一年七月五日、興安丸で葫蘆島を出港した。ようやく内地に向かうことができたが、船内は熱気でむんむんとしている。だが、出された食事はゴマ塩をふりかけた白いご飯のお握りとみそ汁だった。何十日ぶりに口にする白いご飯だが、船酔いと船内のペンキの臭いで食欲がわいてこない。

船窓から見える暗い空、大波に船が左右に傾斜するたびに、わずかに星が見え隠れしていた。突然に「ぼーっ！ ぼーっ！」と低く重く汽笛が鳴った。静かで悲哀のこもった音色だ。苦労に苦労をして、やっと日本の船に乗って内地に帰れるというのに、寿命が尽き船内で亡くなった人がでたのだ。栄養失調、疲労困ぱいによる心身喪失、それに加わるに病気などの果てに永遠の眠りについたのである。遺骨を手にもすることも叶わない家族の悲痛な気持ちは、いかばかりかと胸にこたえていた。戦前・戦中を通して、お国のために尽くした労苦が、こんな悲惨な形になって報われようとは、だれもが思いもよらなかったことであろう。思え

ば思うほど哀しみが深くなってくる。

そんな悲しみ、苦しみにはかわりなく船足は順調で、昭和二十一年七月十四日に鹿兒島港に入港した。

#### 七 引揚げ後の生活

鹿兒島港から福島に向かった。福島の親せきの家にしばらく滞在し、今後の生活基盤をどこにするかなどについて話し合った。農地改革で不在地主として扱われていたことなど、いろいろな問題を抱えていたので、止むを得ず母の実家である宮城県に移って、家族と共に居住することになった。

生活をしていくために未経験な行商、古物商など、昼も夜も形振り構わず働き続ける母の姿に感謝すると共に、そのバイタリティーには圧倒され続けた。これが、苦節二十年の始まりだった。

兄は、宮城県庁に勤務したが、昭和二十五年五月に二十八歳の若さで病死した。このときの母の悲嘆は計り知れないものだった。妹は、母の「せめて教育だけは！」という勧めで、県立高女の四年に編入。勉強に励んだ。卒業後は女子専門学校に入り、教職の道に進

んだ。私は、しばらく母の仕事を手伝っていたが、その一方では向学の気持ちに燃えて止まなかった。私が学校に行くようなことになる、母の苦勞は倍加すると思うと、なかなか気持ちを打ち明けることができずに悶々としていたが、そのうちに母の勧めと遼陽高女時代の恩師、星野先生の励ましもあって東京の大学に進み、昭和二十八年から教職についた。昭和四十年に、母の多大な援助を受けて千葉県に家を新築し、母も同居した。

昭和六十一年、長く勤めた教員生活から退職し、母とときを同じくして過ごす日々となったが、諸種の事情から同年には宮城県に二度目の新築をして転居した。母は、昭和六十二年、九十二歳の天寿を全うした。これまで受けた恩愛に感謝し、これからは報恩に値することを成し遂げる覚悟を固めた。

あとがき

思えば、引揚げ当時は、無事に本土の土が踏めた喜びの奥深いところには、父と幼くして亡くなった弟の魂の残る旅順市の、せめて土とか砂なりと持ち帰れば

よかったという寂しい悔いがあります。

父が官僚として多忙な勤めの中で亡くなり、残された母と兄妹、そして私の境遇は一変してしまつた。兄は旅順中学を卒業したが、進学をあきらめて就職した。妹は旅順師範付属小学校の五年、私は旅順高女に入学する年であつた。当時は、渡満する日本人が日を追つて多くなる時勢でもあり、亡き父、亡き弟の御霊の供養も念頭を離れず、母の同郷の方が遼陽在住であつた関係で、内地に帰ることをせずに、遼陽市桜ヶ丘に移り住んだ。そのため私は二学期から転入するなど、それぞれ環境が変わり精神的に大きな動揺があつた。母がしっかりとしていたからこそ、無事に切り抜けたのだと信じています。母の愛の偉大さを感じています。両親の冥福を祈り、御霊が私たちを守つて下さっていることに心から感謝しています。

ともあれ、この世の至る所 万有に歴史がある。そしてすべてに過去があり、原因を生じ未来があり結果が生まれる。その間、お互いに相交わり、そしてそこに人間関係ができてくる。

各地各人が味わった敗戦の苦い体験を想起し比較するときに、当時堪えられないほどの苦悩も薄らぎ、自分の刺激にもなったのだとあきらめることもできよう。

遼陽に生き、今や老いてゆく高年齢の私たちは、単に過去を追想するだけでなく、他の者、特に若き者が前者の轍を踏まず、ためらわずに本道を邁進するよう説くべきではなからうか。